

供覽

軍務局

經政本部

第三部

第四部

軍令部

T690

三二五

新 屈

別紙佐造佐第一五。歸寫道 第四十七 歸水
雷艇座礁。付政故 屈在也

連于右座礁。就之目下 查同委員。編制 反調中。
有之。余此故 副申也。

明治廿三年七月十五日

佐世保鎮守府司令長官 鮫島真



海軍大臣 山本權兵衛 殿



大長

第一局



海

軍

作造方一五〇号)

第四拾七号水雷艇坐礁三日御角

當廠、於目下組立工事中、日第四拾七号水雷艇本日港十番
運轉、為ノ港務部ノ負操縦、午前十一時出港、午後一時帰港、
際當廠五十噸起重器、傍海岸淺瀬、坐礁致船尾底、
損所ヲ生シ又推進器廻端ノ屈曲セシノ候、索不取敢及御角候也
一、追テ来ルル十五噸入渠セシノ艇底検査ス、キ手筈ノ候、索此故副作
候也

明治三十三年七月十二日

作造海軍造船廠長 高山 栄 調

作造海軍造船廠長 高山 栄 調

海 軍

紙用記筆話電府守鎮賀須横

王

經理局

第一課 藤井

第二課 長

第三課 長

水

此電馳三十七年長内引着投陽ノ際
機園包轉ノ誤ヨリ御戸火薬庫前
ニ坐懸ニ卸シカレ入匠歩セシハ其
振生ハ判明シカラス

第三部

郵政本部 濟 第四部

軍令部

軍務局

第一課 藤井

第二課 長

人事局

明治三十三年 之 月 日 午 為 八 時 十 分 受

供覽



軍務局

司法局

海軍省

0694

司令長官

海軍省

副官

海軍省

艦機第六号

九月三十一日

軍艦艦座礁報告

軍艦艦座礁報告

八月三十一日午後六時五十分ヨロバイオール島ヲ艦首ニ發
 見テ通過シ同時ニ回轉百七十速力凡ヲ拾三里ト為シ午
 前九時四十分ニシテニユーブ島頂ヲ九艦正横ニ見テ針
 路ヲ東北東ニ變ニ續テ北六十二度東ニ變針ニ午前九
 時五十五分艦位ヲ測リ

旗秘別第... 七島嶼

ヨロバイオール島、南西端、西微北ニ分ニ北
 ニユーブ島、南西端、北微西、西微北ニ分ニ北
 北西四分、三北

海軍

ヲ得たり午前十時二十四分再度艦位ヲ測リ

モシカツブ島頂

シエシエネエブ島頂

北北西二分一西
西北西四分三北

ヲ得タルヲ以テ乾出七呎ノ「チヤセリアウ」岩ヲ避クルカ為メ一度

取航ヲ命ジ茅百武拾七號海図ヨリ第七拾九號海図ニ

移リ午前十時三十分正ニ「ワオーレン」島ニ向ハシメタリ時ニ針

路北東四分三東ニシテ十時三十七分艦位ヲ測リ

豊島頂

東微北

チヤセリアウ堆、南西百呎岩南々西四分三西

ワオーレン島

北東四分三東

ヲ得たり依テ「バーカー」島、最近端ヲ距ル「凡」四鏈ニシテ

海図上「チヤセ」外ニ在ル「凡」三鏈ナルヲ以テ充分安全

航路ト確信セリ午前十時五十五分「バーカー」島ニ接近ニ

テヨリ二等兵曹藤野末吉若林三等兵曹代り航極
 ツ掌りテヨリ航定マラハルモノ、如ク艦位少シク取航ニ偏スルヲ
 認ナタルヲ以テ決シテ取航ニ偏セシナサル様余シタリ然レ共当
 時尚ホ目測ニテ「ベーカー」島、最近端ヲ距ル武鏈余ニアリ
 充分海面上拾尋畏ノ外ニ在ルヲ認ナタルヲ以テ尚ホ
 危険ナシト信ジ唯ダ現航路ヨリ如何程ヲ面航ニ偏ス
 ルモ宜シケレド決シテ取航ニ偏スベカラザルヲ余シタリ然ルニ午
 前十一時三分頃俄然坐礁本艦停止セリ依テ直ニ機
 関停止シ命ニ直ニ防水閉鎖ノ号令ヲ下シエモエタリ
 ヲ候用セシム同時ニ水兵並漏水スルノ報ヲ得タルヲ以テ之レカ
 防止ニ着手スルト同時ニストリムニ鑑テ右舷後部ニ遅極ニ艦尾
 「ベーカー」島ニ接近スルヲ防ゲリ
 尔後施シタル應急處置厄ノ如シ

横濱分社印刷

一 坐礁後直ニ測銀ヲ拔スルニ

右舷艦橋倒六尋

左舷艦橋倒五尋四分

艦尾 拾五尋

二本艦ノ坐礁ニタルニ當時風力僅カニ一ニ過キスニテ艦動揺ス

以上艦底ヲ破損スルニナシト認メタルヲ以テ直ニ之ヲ引

御スニツケテ方九ノ坐礁ノ破損部ヲ檢ニ防水ノ方法ヲ

施セリ具方九ノ如シ

第一區劃即チ錨鎖格納所ニ之ヲ防止スルノ途ナキヲ以テ

先其後トシ

第二區劃水兵室ニ於テ糧食庫ハ鉄蓋ヲ緊鎖シ

水雷庫ハ水雷ノ周囲及空隙ニ毛氈蒲團等ヲ詰メ込

ニ鉄蓋ヲ覆ヒ四ノ具他ヨリ支柱ヲ取り出束得ル限

海軍

リ之ヲ強壓セリ

茂三匠割械関兵庫セシク漏水セリ故各倉庫ノ

鉄蓋ヲ堅ク緊メ夫木ヲ立テタリ

三、ストリーム、錨、右舷艦尾ニ運ヒタリ

四、最予潮ニ及ヒ水雷室ノ外前部諸倉庫ヲ開放ニ出来

得ル限リ兵器需品ヲ取出シ艦ノ後部ニ運搬ニ直ニ鉄蓋ヲ

為シ夫木ヲ以テ之ヲ壓セリ

五、水兵室ノ手函衣籠諸物品一切ヲ後部ニ運搬セリ

六、前部ノ大砲及ヒ必要ナラサル大ケリ、錨、鎗ヲ始メ艦

ノ前部ニ在ル重量物ヲ後部ニ運搬セリ

七、漢舟来リタルヲ以テ「ボア」錨ヲ右舷前方ニ運セタリ

但シ「コリ」ヨシ、マツト「ハ」ハ「ニ」テ到底破損部ヲ覆ニ足

ラサルノミナラス破損セル艦底板尤右ニ突出シ

横濱分社印刷

之ヲ使用スル能ハサリシ

午後零時三十分頃最于潮ニ於テハ本艦ノ九舷ハ水深ニ
吠右舷ハ五尋以上アリ一ノ突出セル岩頂艦底在ル様思
考セラル

午後一時頃ヨリ潮ハ次ヲニ増加元午後四時浮上リタルヲ

以テ艦内ヲ検スルニ第一第二区劃ニ漏水スルノ外異状ナ

キヲ認メ諸錨ヲ揚ケ換舟ヲリヤ微速カニ進航小部島

ノ北西方ニ来リ午後七時二十五分碇泊セリ

九月一日午前七時板鏡半速凡ソ七哩速カク以テ仁川ニ

向ヒ午後九時三十分軍艦大和ノ附近ニ投錨ニ直ニ詳細

ノ大匠及ヒ司令長官ニ電報ニ大和艦長ニ到リ做修理

ノ候議ヲ為シ先ツ大和艦匠師ヲシテ本艦上等兵曹上

等城岡兵曹ト共ニ破損ノ現状ヲ熟覽セシメ更ニ陸上

遣ハシ船大工、敷及倣修理ニ要スル材料、有異ツ取

調ヘタル結果、帰朝スルニ足ルキ倣修理ニ充分坎地ニ於テ

出来得ルヲ認メ、坎首電報塔合ヲ請ヘリ

坐礁當時ノ潮流、八月三十日仁川港満潮ハ午前八

時ニシテ坐礁前後ハ南西方ニ流ルニ逆潮ナリトモ「ベーカー」

島附近ニ限リ著シク北西方向ニ流ルヲ認メタリ而シテ

坐礁當時ハ八分ノ潮ナリ

風向北東四分三東即チ艦首ナリトモ力ハ一ヨリモ弱ク

毫モ影響ヲセサルヘシト信ス

坐礁位置本艦橋即チ岩上ニ於テ測リタル位置ハ

「チエウブ」島、六百吉呎山、北西微北四分一北

「ウオレ」島、西端ニ在ル突出岩北東微東

「ベーカー」島、南西島百六拾三呎頂、北八十三度西

毎
頁

ニシテ即チヨロカリ島ノ南西島百六拾三呎頂ヨリ南八拾三度
東凡ソ四鏈ニシテヨロカリ島ノ最近端ヨリ或鏈距離ナリ

假修理ノ方法

本艦破損部ハ第一第一区割ノ艦底ノミニシテ汽機汽罐
ハ勿論艦体其他ニ於テハ一故障ナキヲ以テ若シ平穩ノ天
候ナレバ帰朝スルノ敢テ難キニ非ラサル様信スレ共天候ノ
変ハ計ラレサルノミナラス若波浪ノ為ニ第一区割ヲ破ラル、
一アルハ一艦余ニ関スルヤモ難許ニ付寧ロ應急ノ假修理ヲ
施シ帰朝スル方適當ナルヲ信シ假修理ヲ上申セリ其地ハ
潮ノ干満大ニシテ大潮ハ凡ソ三十呎小潮ニ於テ二十五呎
アルヲ幸トシ干潮ノ際浅洲上ニ砂俵ヲ以テ假船台ヲ設ケ
満潮ノ際ニ本艦ヲ引揚ゲ木材ヲ以テ假リニ艦底ヲ造
築シ充分コトキレラ為ニ使ヒ帆布ヲ以テ之ヲ覆ヒ水

防ヲ為セント欲ス歟換ノ兵器需品流出ノ需品糧食等
モ少カラズト虽氏當時尙詳叙ノ取調ハツ為ス能ハルヲ以テ
追テ報告セントス

右坐礁ノ始末報告仕矣也

明治三十三年九月二日於韓國仁川港

艦艇長 松永光



常備艦隊司令長官東郷平八郎殿

横濱分館印

艦坐礁始末書

本艦芝罘ヨリ仁川ニ向テ航行中明治三十二年八月廿四日午前
 九時四十分朝鮮濟南浦東水道ニ入りテヨリ坐礁者時
 迄艦長ト共ニ艦橋上ニ罷在申交者時天候ハ晴ニテ
 凡白ノ康々北ニテ其力一当隣仁川ノ滿潮時ハ午前八時
 ナリシテテ潮流ハ逆潮ナリシ坐礁前ノ針路ハ北東ヲ東
 ニシテ艦首ハソウオレシ島ニ向フ午前七時三十分坐礁スヤ
 直ニ兩舷棧停止防水扉閉鎖ノ令下ルカ官ハ直ニ下
 甲板ニ下リ損所ヲ核シ申交ルハテエトヨクカシ内ハ海水既ハ
 満水シカ一兵員室下甲板防水蓋ハ確定ニ閉鎖シテモ
 何分下甲板全体ハ艦底ヨリ押上ケラレ水雷頭部ハ下甲板
 ヲ突破リ水雷倉庫ハ破損シテ水雷ハ少シク庫外ニ押出サレ
 シヲ以テ海水侵入甚シクハ二兵員室ニ於テハ彈藥庫上

横濱分社印刷

部漸時浮上り而船棹位退し公時、艦尾錨索了張申候処
 離礁凌矣漏水ハ桶止マズ遂ニ水堪半條ト一致スル至リ候
 時吃水前部ハ吃水右部五呎依リテ而錨ヲ收ト午後六時八分
 出艦候七時五十分部高北西方ニ假泊羽立日午前七時出艦候
 九時十分仁川ニ投錨仕矣右始末書如件矣也
 明治三年九月二日

龍京親海軍中尉 海老原 啓

龍艦長海軍中尉松永光政殿

横濱分社印刷

始末書

私儀

明治三十三年八月三日午前十時五分次直按針午二等兵
 曹藤野未吉と交代し其際出来四分三東之鐵路ナル美
 言継尚五反日當りてハカシ島ト其巨島以テ航途中
 新部追撃砲右揃トシテオレシ島丸跡ト一直線ニ録路ヲ
 保ッ様言継交代件候依テ始末書如件

明治三十三年八月一日

三等兵曹 若林佐吉

我 二書共
鐵路ノル美
進中
録路ヲ
佐書

2020

九月一日ノ書
イラン

藤嶋長海軍少佐松永光敬殿

清

年

始末書

明治三十三年八月三日午前十時幸五ヶ月前按針平若林
 三茅等舟上交代シ其際北東海東ノ針路ナル事言繼
 キラ受ケ其針路ニテハバカ山島ト某巨島ヲ以テ航進中
 一本艦前砲台ノ右舷ハビルドトウオレトニ島ノ左端ト一直線
 ニ針路ヲ保テ航進セリ然レ流潮有テ始終艦首ヲ左舷
 ニ流カレ候事キ艦長ヨリ角度九舷ニ寄リ注意モ
 有テ矣幸凡ソ三度マニ右舷航ヲ取リ航行中凡ソ三
 分ノ一点右舷ニ寄リ至テ航柄ヲ中央ノ位置ニ直ニ航
 進中急流潮ノ為テ俄カニ艦首ヲ左舷ニ寄リセラレ
 矣ニ付直ニ右舷航ノ度ヲ取リ矣得共未ク艦首
 右舷ニ廻リナル内既ニ坐礁仕テ矣依テ始末書如
 件矣也

横濱公証印刷

明治三十二年九月一日

二等参事 藤野 末吉

艦長松永光敬殿

清

年

始末書

明治廿三年八月廿一日主機回轉數百七拾ヲ以テ航行中
 前拾度時多分俄然船體之激動ヲ感シ右舷機自ラ
 停止シ左舷機其回轉數貳拾四五位ニ減ヤリ今時艦
 橋より兩舷機停止ノ余アリ直ニ左舷機ヲ停止ス松本時
 十分放射器使用ノ余ヲ度ケ機関部員ヲ防水配置
 就ケ第一第二放射器ヲ使用ス汽機汽罐共ニ未ク
 精細ニ検査ヲ經サルモ毫モ異状ナキモノト認ム右ニ通リ
 相違無之依而始末書如件ニ候也

明治廿三年九月二日

艦隊組海軍大機関士 松本熊本

艦隊長 松永光敬殿

編纂分社印刷

俵覽

軍務局

軍政本部

第三部

0712

軍令部

濟

司令長官

參謀長

參謀

副官

九月二十一日交付

佐々木廣

明信

摩普第二〇六號

九月十五日進

生

八月二十日午後、千ヤイナ、子ビゲリシヨシ會社野馬汽船

淡水本艦碇泊點附近棧橋より出船、際し潮流、為

同船々尾本艦々首、觸接致候間別紙當直舟

校報告明細書寫し淡水船長手書相添、此段報

仕候也

明治三十三年八月十七日上海

摩耶艦長 佐々木廣

長

摩

第一局

常備艦隊司令長官東郷平八郎殿

追テ本艦、蒙リタル損害ハ極メテ少許カニシテ本艦

於テ直々修理ヲ了スベク候条は段副申候也

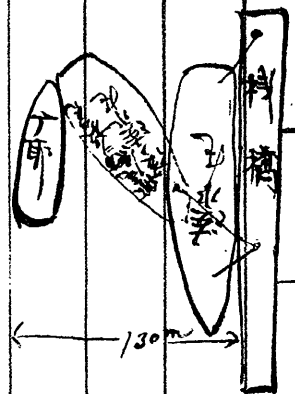
本艦淡水丸觸接シタルト付報告

八月十六日午後某二時二十分チヤイナ、子ビゲリーシヨシ、コンパニ
一所属汽船淡水丸本艦傍ノ棧橋ヨリ出帆際潮
流ノ為メ其船尾ヲ本艦々首、觸接シタル個所破損
ヲ甚クタリ

一右舷側艦首飾 剝奪

一ジエキスタフ附屬スタシヨシ 屈曲

一ジエキスタフ取付ケ「ナット」 落失



証
書

右略當、如ク其當時ハ漲潮ニシテ約二哩ノ速カヲ以テ漲流セリ
 本艦ト淡水丸ト反對ノ向キニ碇泊擊留セリ然ルニ淡水丸ハ
 出港ト察シ船尾ノ紡ヲ先キ放テ船首紡ヲ張リ込メ暇モナク
 流潮ト壓セテ遂ニ彼ノ右舷船尾本艦右首ニ觸接シタリ
 此時ニ本艦錨鎖ヲ延シテ下リシテ以テ格別ノ激動モナク暫
 時ニシテ相離レタリ

此時淡水丸、本艦ニ觸克部カカウニシテ約四吋至六ノ
 破損ヲ受ケレリ認ム

右ノ報告告候也

明治廿三年八月十七日 摩耶當直將校

村上 銀 吉(印)

摩耶艦長佐々木廣勝殿

Shanghai

16th Aug 1900

Swinging the S.S. "Tamsui" to the
flood tide at wharfing wharf we
fouled the stem of the Japanese
man of war "Maya"
but doing only slight damage.

J. H. Brown
Master,

S.S. Tamsui

0716

07120

總政本館

軍務局

軍令部

電譯八月十二日午後八時上海發

摩耶

海軍省

確

支那航海会社特航淡水水務局
又本館々角ニ當タレルモ本館總ニ異

狀ナシ

第三部

第一局

次長

（江戸川印行）

IMPERIAL GOVERNMENT TELEGRAPHS (Delivery form)

Station <i>Kaigun 156</i>	Office No. <i>10457</i>	Address <i>Kaigunsho</i>
Received Time <i>16 8900</i>	By <i>K</i>	<i>Tokio</i>
Class <i>S</i>	Original Office <i>Shanghai</i>	Remarks
No. <i>6457</i>	Words <i>16</i>	
Date <i>16 8900</i>	Time <i>8 PM</i>	
<p><i>Shinakokai Kaisha</i> <i>mochifure tamsui portendo</i> <i>banitun apellens Kanshuni</i> <i>ataerumo apellens praales</i> <i>acatus</i> <i>praeceps</i> <i>Sasaki</i> <i>Maya</i></p>		

0718

0719

第一課
第二課

軍務局
彦

第三
課

憲政本部
田部

供覽

憲

海軍省

臺灣參第一七六號

了云水雷發隊係備付甲二回方中礁顛
事之要之要成一言水之之之之海法隊司
今了了兩出之之付之及投告之

明治三十四年十月八日

臺灣總督男爵兒玉源太郎

臺灣總督印

海軍大臣山本權兵衛殿

接
明后

海

軍

馬水第三四八号

第二回天坐礁顛未御届

本月廿日午后八時過キ以ヨリ北東ノ風力漸々増加シ本隊ノ前海ニ敷系留ノ為設艇中其位置ヲ変スルモノアルニ至リシヲ以テ総艇ノ点火ヲ命ジ警戒ヲ加ヘシム羽立廿日午前二時以ヨリ風勢尚増加スルヲ以テ全午前五六時ノ各各設艇ニ我克港ニ面航績ヲ第一回天モ又全港ニ面航其航進中測天島ノ西岸ニ吹キ附ケラレ一時危殆ニ瀕セシモ幸ニ故障ナキヲ以テタリト雖モ碇泊ニ際シ暴風ノタメ進退自由ナラズシテ全港ニ碇泊ノ支那形艇ニ接觸シ船側及錨索等ニ多クノ被害ヲ加ヘシメテナ

ルモ其程なハ未タ判明ナラス全十一時過キテ二回天モ又我
 克港ニ回航セントシ其進航中「ラダケエ」切斷シ進
 航意ノ如クナラズテ「港口風櫃尾角沖」ニ投錨忘息ノ
 傍理ヲ加テ「投錨進行中再ヒ「ラダケエ」切斷シテ
 進退ノ自由ヲ失シ遂ニ對岸時裡沖ニ投錨スルニ至リシト
 索尼其位置高当ナラサル如ク望見セシテ以テ其位置
 ヲ指セシムルト同時ニ救助シテ發没艇ヲ回航セシメタル
 ニ當時ノ位置ハ高当ナラサルモ未タ危險ノ位置ニアラ
 スモ風波甚タ強高シテ先分接近スル能ハサリシト
 本船ニ於テハ雙錨ヲ投シ直ニ「ラダケエ」ニ危急傍理
 ニ着手シ再三之ヲ試スルモ其効ナク全折十時至リ終

三望礁セト羽立廿三日至リテ風勢大ニ減衰シ早朝テ二回天ノ望礁ヲ
 認メ之ヲ臨控スルニ船體別ニ傾斜ナク船首中尾ノ底部殆ト平
 等ニ抵礁シキルニ接シテ左右船腹ニ於テ前部ニ三四ケモ
 后部ニニケモ微少ノ凸状ヲ呈シタル部ハ下ニ漏水ヲ認メ
 依テ卸シ方ノ準備ニ着手シ翌廿三日午后者廿日離礁シ浮出
 リテ後程ホ漏水及船體ニ異状ヲ認メスハ及ビ尾舷カ

昭和廿三年十月廿日

馬公水雷隊隊長司令花白満之助

台湾總督府海軍見立部長 櫻

佐世

確

佐機密二七一號ノ四

進達

軍艦葛城堅礁ニ関スル顛末報告書

明別紙寫之通及進達候也
明治三十三年十一月十三日

佐世保鎮守府司令長官 紋高

佐世保鎮守府司令長官印

第一編 海軍大臣山本権兵衛殿



海軍

接月受日



葛秘氏一〇号

進達

一坐礁敷末報告

吉通

一富士川航海長始末書

吉通

一福島分隊長坐礁前當互明細書

吉通

一今泉中尉坐礁前後明細書

吉通

右進達化便也

明治三十三年十月廿日

大島泉清村

葛城隊長 伊東吉五郎

佐母屋鎮并府司令長官 鯉島貞規殿

海軍

坐礁顛末報告

一坐礁ノ時刻及場所

明治三十三年十月七日午前、時伊豆國大島泉津村
海岸に坐礁ス

二凡向ノ風力

北東ノ向午後十時頃迄連吹シ是ヲ以テ北ノ風位北々西ヲ
東ノ向ノ變遷シ或ハ少時北ノ向トナリシレドモ凡向ハ概シテ
北東トシテ風力最モ強ク時四トシテ微ナル時ニナリシ而シテ最後
驟風雨即チ十時半頃ヲ又凡向北東ト定マレリ

三天後ノ模様

横須賀松輪前ヲ微雨来リ港外ト出ルニ及ビ濛雨トナリ
是ヲ暗黒トシテ降雨絶エガリシモ觀音崎及劍崎燈光
明瞭ト望見シ城ノ島燈光ハ先カ稍々微ナリシモ約三十分間之ヲ

海

軍

望見

晴雨計ハ八時頃より漸次降下シ其度始々著シカラザリ也午
 后土時より其降下ノ度ノ速々スルヲ以テ十一時三十分頃天候ノ
 陰惡トヤリシヲ顧慮シ一旦館山ノ田尻セトセシキ豫メ急行ノ
 命ヲ受ケ加コシ土時四十分頃より漸次晴雨計上昇ノ模様ヲ
 示セシヨ以テ航行ヲ継続セリ

降雨中間々電光ヲ認メ驟風雨ニ屢々来リシカ十時三十分頃
 最ニ劇シキ来龍来リ受ケ又十一時三十分頃最後ノ驟風雨ノ来
 襲ノ豪シク是より雨脚漸次稀サトナリ土時五十五分頃より雨
 雲稀薄トナリ七時十分頃より間々微カク月影ヲ認メシモ
 リ波浪ハ艦危ヲ来リ暗黒トシテ明確ニ其高ヲ云フ能ハスト
 莫ニ大約三乃至四ノ帯トナリ其地天候ノ模様ハ別紙航路日
 誌寫ノ如シ

四潮流ノ方向及速力

針崎及城ヶ島燈光ニ由リ、磁位測定變針、後々北東流ノ潮流ヲ受テ、其速力ハ北東風吹續中、ナルヲ以テ、一時間一乃至二哩ナリト思考セリ

五我艦ノ針路及速力

磁針路 南五十三度 西

羅針路 南五十五度 西

速力 五分ノ一速力ニ對シ、七節

兼テ海軍大臣ヨリ、第五法川丸放難ノ為、急行ニキ命シ、接シ、三日測深機、試運転ヲ終ル、出帆セシム、既海中送潮等、為テ既力減少、スルニ至ルハ、五分ノ一以上ノ速力ヲモ使用セシト、後期セルニ、又候、靜定ニシ、速五分ノ一速力ヲ使用スル、トナリ

海軍

昔程地 横須賀港

到着目的地 遠江國榛原郡 白羽村 海岸、坐礁七茅五

肋川丸 叔難ノ為ニ余ニ依リ白羽沖合ニ到着ノ目的

ヲ以テ既行セリ

臺灣現狀 五ノ一連力回航五十二ノ四罐點火汽 歷六十五所

之始ニ陸岸ノ發見シタル時刻

十月六日午後十時五十五分頃 雨雲少シク稀薄トナリ 艦首ニ當リ濃厚

ナル黒雲ノ條ヲ棚引キシ 北キモノヲ認ム

七枚ノ陸岸ヲ發見シタルトキ陸岸ノ距離及方位

艦首ヲ右舷約四點距離 左舷内外ニ一岬角ヲ認メ續テ其南方ニ樹

林及海岸ヲ認メ所ノ向波ヲ認ム

八世艦ヲ避ルニ為テ施シタル處置及其時刻

十月六日午後十一時五十五分 艦首ニ當リ黒雲ニ似タルモノヲ認メ或ハ

艇ノ乳々崎附近ノ押流ナレシク慮リ直リニ面舵一杯ヲ令シ同時流域
ノ運転ヲ僅止セシテ續テ思案ハ全ク陸岸ナリヲ知レリ以テ全速後退ヲ
行ヒシニ波濤ノ爲メ艇ノ回転充分ナラズ後退更速ヲ怒濤艇危ヲ撞
撃シ事ヲ遂セ七ヨ正子觸礁ナリ

九艇ノ始メテ墜礁シタル部分

艇首キレシ及機関室左舷側附近外倉

一ノ墜礁後施シタル處置

十月六日午後十時五十分艇首ノ北ケレ危險ノ境ニ至リ右退全速ヲ行
シモ波濤高ク且ツ風向艇危ヲ来ル艇面転充分ナラズ高揚力ト波濤ノ
爲メ前進シ七ヨ正子墜礁ス至リ之レト同時ニ左舷錨ノ用意ハ防水
扉ヲ閉鎖シ防漏幕出シ方用意ストリム錨運搬用意ハ大艇出方汽眼點
火ノ行ハ鐘測ニ依リテ前部四尋後部五尋ニシテ左舷中部ニ尋ノ測
候ヲ艇ハ左舷中部ニ於テ岩礁ニ墜キモノト察シ総負リ右舷ニ於テ艇ノ

海

軍

傾斜セシテ數次后退シ以テ離礁ヲ圖リシモ其効ナシ更ニスパンカーノ
 展シテ艇首ヲ左舷ニ變シテ退リ試ムルモ亦効ナシ而シテ風力ハ漸次強ク
 波濤モ亦高シ

七日午前。時廿七分迄ニ碇室ノ汚水漸次増加シ機関室左舷側ヲ以テ
 浸水ヲ生セシノ報アリ依テ右舷錨ヲ挽シ防漏葦席下方ヲ試ムルモ波
 濤高ク且ツ碇室ノ為テ艦底線ヲ通スルヲ得ス尚數次後退ヲ試ムルモ
 艦底シテ退却セズ防漏葦席使用ノ方ナク且ツ一時十三分ニ至リ推進機若
 碇ノ當リ又之ヲ使用スルヲ能ハス艦機室ニ至リ是ニ到ル底浮出ノ見込
 ナク且波濤ノ為テ大艇ヲ卸シストリーム錨ヲ運搬スルヲ能ハザルヲ以テケ
 ヲケ錨ヲ艇尾ニ板下シ右舷錨ト共ニ風波ノ為テ艦ノ陸岸ニ押壓
 セラレテ防キ候リニ左舷艦首ニテ海岸岩礁ニホーサー一條ヲ取リ
 置キ内材卸方ニ取掛リ同時ニ艦内ニテ出来得ル限りノ材料ヲ用ヒ
 艇體ノ繫維準備ノ行ハス

同一時三分機室給水機ノ下方陥底破損ニ浸水ヲ生ズル報アリ
直科負ノ處リ應急防護ニ當テシテ遂ニ成ニ効スルに至ラズ依テ機
長ニ臨機處分ヲ命ジ

同一時四十五分に至リ機室汚水ノ増加スルヲ以テ蒸流ノ噴出セシメ
機室負ノ上ニ直外信号部負等ト共ニ糧食食品其他必要物品ヲ
上甲板ニ運搬セシム

同一時頃乃泉中尉ノ状況報告ヲ為テ機須賀及東京ニ出張セシム

同一時十五分に至リ機室負ノ呼集シ喧騒ヲ制シ更ニ各部署ノ定メ水兵部

負ヲ以テ引續キ内機部方スパンカ、取外方諸艇部方、鋪運搬等ノ

諸準備ヲ行ハシメ機関部負直外信号部負ハ陸上ヲ救難人

夫ノ補助ヲ得テ左舷前部旋回砲門ヲスパンキングブームヲ以テ使リ

機稿ヲ作り糧食小銃其他必需品等ノ陸上ニ運搬セシメ續テ將校外

士官ノ上陸ヲ命ジ主計官ニ食料、衛生酒、食器等ノ準備ヲ命ジ

海 軍

向三時頃諸田材ヲ甲板下ニ送り續テスパンカーヲ取外シ艇ノ繫碇方ニ概ル時ニ浸水ノ為メ艇尾沈下シ後部ハ海水艇長室ノ半高以上ヲ浸セリ
艇繫碇方法左ノ如シ

艇ノ転倒ヲ防クノ目的ヲ以テ大橋トツブ下方左右ニ田材(トツブマスト、ソライス、カース、ヤード等)ヲ綁着シ各端ヲ海面ノ岩礁ニ達セシメ支柱トス

大橋后橋ノ橋頭ヲ右舷側陸上ニホーサー一條宛ヲ取り緊張ス
前橋々頭ヲ右舷艇首陸上ニホーサー一條ヲ取り之ヲ収束張ス
諸艇卸方用意ヲ行ヒケツダ錨ヲ測量艇ニ乗セ右舷艇尾ニ運搬投入ス

大艇ニストリーム錨ヲ終載シ右舷艇尾ニ運搬投入ス
之シト同時ニ諸艇ヲ卸シ不用モノハ陸揚シ大艇流艇ハ八時三十分頃
波濤ノ少シク静穏トナル見定メ之レヲ卸シ流艇ハ直チニ波濤降ニ應

況セシム

七日夜、船内にて時校一、准士官一、掌舵長属一、兵員十六名、當直
セシ、其他に陸上へ令管セシム

八日、至り右舷バウ錨ヲ場ケムルニ折損シテ、直リ右舷シ
ト錨ヲ投下シ左舷バウ錨ヲ大艇ニ搭載シ左舷艦尾ニ投入シ翌
九日左舷艦尾ニ投入シ置キタルストリーム錨ヲ右舷ニ移シジブブ
ムツ左舷シート錨ノストツリニ綁着シ左舷側岩礁ニ對シ支柱ヲ造リ
一先ッ艦ノ繫索維方リ終ル

二損害ノ状況

坐礁ノ爲ニ生シタル損害左ノ如シ

一 龍骨ノ脱損

二 左舷側ビレッジキール下方ニ於テ石炭庫ト罐室トニ跨リ長約四米
突幅約一米突六百ノ艦底缺損

海

軍

三 左舷側 ビルンキール下方に於て機関室外方に當り長約三米突幅

約一米突五百ノ外板脱落

四 舵ノ一部損傷

五 推進機少シク曲損(坐礁後々退リ試ニ推進機ノ岩礁ニ觸レル)

(由ル)

右ノ報告候也

明治三十三年十月廿四日

伊豆国大島泉津村

善城艦長伊東吉五郎

佐田保鎮舟存司令長官殿 負規殿

表本義寛
福島盛太郎

一																				
二																				
三																				
四				SE		NE	0-1	3002	74	73	68	GC		NK	9	S			B.B. 12/7	
五																				
六	3	5		As 207°		NW	2	3002	74	73	60	P/101 OPRF		N	10	M				
七	2/3	0/0	50	SE 2/5		N	2	3002	72	69	67	"		"	10	"				
八	7	0	120	" S40°W		"	2	3001	72	69	67	"		"	10	PM				
九	5/1	5/9	194	" S55°W		NE 6N	2	3000	70	67	65	OARL		"	10	"				
十	8	0	274	-		"	3-4	2999	68	65	62	75/101 OPRL		"	10	R				
十一	7	1	343	"		NE	4	2998 2997	69	65	64	"		"	10	"				
十二	8	0		"		"	4-5	2997	67	65	64	OCPAR		"	10	"				

0735

始末書

明治三十二年十月六日午後五時十八分横濱留港ヲ抜錨ス時ニ降雨濛
 朧ク一葉ニ葉ニ海堡間ヲ航過シ六時四十分觀音崎及葉ニ葉
 三海堡燈光(觀音崎燈光南西々西ノ西葉ニ海堡燈光北々
 西々西葉ニ海堡北西)ニ依リ船位ヲ測定シ觀音崎燈臺ヲ
 右舷正横約一哩ニ望ムル地ニ在ルヲ以テ針路ヲ正南ニ變ス但シ
 此地ニ來ルマテ南東々南ノ針路ヲ以テ航進シ來リ
 同七時廿五分觀音崎燈光及劍崎燈光ニ依リ(觀音崎燈光
 北々西、劍崎燈光西南西)船位ヲ測定シ船ハ劍崎燈光ヲ
 西南西約五哩ニ望ムル地ニ在ルヲ以テ針路ヲ南半度西(磁
 針路南三々八度西)ニ變ス此間北風及落潮ニ乘シ一時間
 約八哩ノ速カク以テ航走セリ
 同八時四十分留港内ノ巡檢ヲ終ヒ艦橋ニ上リ急トキ艦長及當

直將校ヨリ八時廿五分頃城ヶ島燈光ヲ発見シタノ報ヲ得タリ
 然レ、劍崎燈光ノ左舷艦尾ニアル測量艇ノ為ノ方位ヲ測定
 スルヲ能ハサルヲ以テ暫ク面航ニ転航シ約西北北ノ針路ヲ以テ
 約五分頃航行レ劍崎燈光ノ方位測定後繞ラ城ヶ島燈
 光ノ方位ヲ測リ劍崎燈光ヲ北々東城ヶ島燈光ヲ北西
 北ニ望ミ原針路ニ復レシツ、艦位ヲ高上ニ記入シ艦ハ劍崎
 燈臺ヲ北々東約三女渚ニ望ケ地ニ在ルヲ知レリ依テ此地
 照テ大島乳ヶ崎ヲ約三渚神子元島ヲ約一渚ニ離ス如ク針
 路ヲ定メ南廿三度西ヲ得之ト自差二度西ヲ加工羅針路
 ヲ南五十五度西トシ艦首原針路ニ復セシ頃引碇キ談針路
 ト表針セリ此際艦長ヨリ乳ヶ崎附近ニ於テ潮流（東向）
 ノ偏壓ヲ受ケサルヲ注意シ且ツ此針路ヲ以シモ左舷ニ
 偏セレサル様訓達アリ

針路ヲ南四十度西ニ変シテヨリ城ク島燈光ヲ右舷正横後約六
 點ニ發見スルニ至ル迄一時間ノ速力約六哩ヲ示セリ而シテ八時
 五十分頃ノ艦位ヨリ推考スルハ火シク西方ニ壓セラレ多少ノ自轉
 ノ増加セシヨリ速力ヲ減殺セシメラレシヲ覺ユ而シテ八時
 於ケルパレントログハ七哩ニノ九時於ケルモノハ七・四哩ヲ示セリ
 期ノ切リパレントログノ所指ニ不足シ來ヤニ觀アリト云テ六時ヨリ
 九時ニ至ル迄ノ航程ト其所指ノ積算トハ大差ナク且ツ羅針
 路南四十度西ヲ以テ航行中ノ速力六哩ナリシヲ以テ新航路
 對シ艦ノ速力ハ此現狀ニ於テ爾來航海ニ來ルニ通常平
 均速力七節ト大差ナカレバ推定シ暫クパレントログノ運動
 ニ留意セリ

午後十時頃ヨリ風力不定ニノニ乃至四ニ達シ驟風雨時々降
 り而シテ風向ノ多ク北東ニノ波濤ノ高サハ三乃至四且ツ九時十

時ノ頃、盤山下田ノ滿潮時ヲ推定シ相模海、於ケン干潮時
 三ノ是ヨリ漲流起ル可ク東北東海流ト合セテ航カト抗タ可
 シト虽モ風向舩尾ヲ來レルツ以テ航カシハ大層ヲ生セザル可レト
 推定シ舩位ニセテ即トハレトログノ指示、依リ推測航行セリ
 同十時頃ヨリ風向、表遷甚シク東ヨリ北々西ノ間ヲ變位シ或ハ
 東風トナリシヲアリト虽モ多クハ北東風トノ間ニ驟風雨ノ來
 襲アルトキノ外風力ハ輕減シ其力ニ乃至三ニ降リタルツ以テ風
 壓ヲ變クルハ少ク少ク減殺セラレタリト信ス而シテ十時三十分頃驟風
 雨ヲ受ケル
 同十時頃ヨリ舩ノ概位大島附近ニ接近スルツ以テ大島ノ發見ニ
 務メタルニ濛雨ニマス天暗黒トシテ展望界甚狹ク之ヲ發見スル
 能ハズ且ツ針路ニ變針以テ表々五度ヨリ六十五度ノ間ヲ航シ殊
 ニ五十九度ニ辭針セシメテヨリカクニ旨當直時候ヲ聽取リ却

ヲ廻つ右舷、偏流セシヲナキヤノ疑感ヲ生セシモ尚一層大島ノ発見、注意セリ

同十一時三十分頃劇シキ驟風ヲ受ケテその後雨脚稀少雨雲稀薄トナリ十二時五十分至リ忽然廻ノ前面、黒雲低リ棚引キシカキモノヲ発見シタルヲ以テ廻ノ帆ヶ崎附近、壓流セラレシヲ恐レ之ヲ廻長ニ報セントセシ刹那廻長ヲ面航一杯停止、銃ヲ後退全連ヲ命セラレ共向、先ノ黒雲、全ク陸岸ナラシ知レリト云々波濤廻尾ヨリ驚未レ廻ノ回転先ヲナラズ前進隨カノ處ヲ七日白子迄、触礁セリ

壁礁前航路、於ケン始末右ニ通り候也

明治三十三年十月廿四日

航海長 富士川 一五〇

葛城廻長伊東吉五郎殿

也 追々自差表及高潮時表、一部抜萃相添候

准 旨

船頭目録

船名 三井物産

Ship's Head

Deviation.

SE⁶S

0-35 E.

S

0-15 W.

SW⁶S

2-0 W

SW

2-5 "

SW⁶W

2-0 "

W

1-0 "

W⁶N

0-40 E

0742

0743

種々蟹類山及下田高瀬時

海

軍

坐礁前当直明細書

明治三十三年十月六日午後八時当直トナル時ニ雨降り天濛シ艦
 位刺崎燈台ノ南東イ東ヲ東約二哩ヲ在リ風向北東
 羅針路南四十度西ナリ八時三十分城ヶ島燈光ヲ右舷正
 横後約二莫ニ発見ス雨降り天暗キカ故ニ燈光微ナリシモ
 確ニ具青光ヲ認メタルカ故ニ其城ヶ島燈台ナルヲ信シ直ケ
 ニ之ヲ艦長及航海長ニ報ス艦長直ケニ艦橋ニ来ル須臾ニ
 シテ航海長艦内ノ巡見ヲ終リ艦橋ニ来リ艦位ヲ測定
 ス此時一時針路ヲ西ニ変シ燈台方位測定ノ便ニス約五
 分ヲ経テ元針路ニ復ス八時五十分城ヶ島燈光ヲ北イ東
 約三哩ヲ見テ南五十五度西(羅針路)ニ變針シ神子元
 燈台ニ向テ(乳ヶ崎)左舷正横約三哩神子元燈台ヲ右舷正横

毎
頁

約一哩ニ見ル針路)航用四維針儀ハ南西三西ニシテ原基四維
 針儀ト差ナシ新針路ニ就キタル後航路ヲ熟視シ居リタ
 ルニ常ニ取舵ニ寄セラレ、ノ傾向アルヲ以テ之ヲ艦長ニ報セシニ
 艦長ニ定針路ヨリ左方ニ寄セラレザル様始終稍面舵採
 リ進ム可キヲ命セラレタリ由テ更ニ之ヲ按針手ニ命シ常ニ原
 基四維針儀ニ注意シ針路ヲ左方ニ偏セシメサリシ此故ニ針
 路ハ南五十五度西ヨリ南六十五度西ノ間ヲ左右シ南五十
 九度西ニ靜針スルノ時多カリキヨ尋テ艦長ヨリ艦首艦橋
 ノ見張ヲ嚴ニスベキヲ命アリ九時五分城ヶ島燈光ヲ右舷艦尾
 ニ失ス九時三十分頃劍崎燈光ヲ失ス波浪高キヲ加ヘ風向
 屢々變シ具カ定テラス十時頃ヨリ驟雨屢々来リ雨頗ル
 強ク最モ甚ダレキ時ハ四面殆ント咫尺ヲ并セス風力強キハ四
 ニ及ブ時々電光閃ク十時三十分晴雨計ヲ驗スルニ九九八ッ

示セリ十時二十九分九六ニ急降シタルヲ以テ之ヲ艦長ニ報シ命ニ
 ヨリ十五分毎ニ晴雨計ヲ記スルトナス十時十五分二十九分三
 十分二十九分九二トナル此時艦長ニ天候ヲ慮リ館山ニ引
 返サントシ具意思ヲ機関室ニ通シ室内ノ移動物ヲ固
 縛セシメタリ十時四十五分晴雨計停止シ上昇セントスルノ頃
 アルカ故ニ館山ニ引キ返スヘキノ意ヲ翻シ前進ヲ續行セリ
 此時ニ到ルマテ濛雨為ノ艦ノ周圍敷針ヲ距ツルモ尚ホ物
 色ヲ辨スル能ハス艦ノ速力九時七四哩十時八〇哩十時七
 一哩ナリシ九時頃ヨリ漲潮トナル潮流ニ殆ント正首ヨリ来
 リ機関ノ回転數五十二ニシテ之ニ對スル速力ハ平水ニ於テ七三
 哩ナリ潮風及浪ノ關係ヨリシテ速力ハ約七節半ナルハク
 依テ直ニ終リニ於テ艦位ハ乳ヶ崎附近ニ在ラ稍定
 針路ヨリ右方ニ偏セルモノト思考シ常ニ大島ノ位置

毎
 頁

発見ニ番意ヤリ土時四十五分頃、雨稍霽シタルモ天尚濛
々遂ニ大島ヲ発見スル能ハサリシ土時五十四分頃次直將
校ト交代ニ船橋ヲ去ル

船橋ヲ降り海固室ニ入り將ニ日誌ニ記入セントスル際船橋
上面舵一杯ニ次ラストツブノ号ヲ令アリシカ故ニ直ニ船橋ニ上
リシニ船首ノ方向ヲ控テ黒キ山様ノモノヲ認ノ須臾ニシテ前
面ニ波浪ノ岩礁ニ激スルヲ見タリ此時全速後退ノ号ヲ令
下リシモ船ノ楕力容易ニ止マラス加フルニ風波船尾ヨリ
来リ潮流右形船首ヨリ来ルカ故ニ右形ニ回頭ス
ルニ難ク正子遂ニ坐礁ニシタリ

明治三十三年十月十四日

葛城隊長海軍大尉福島能太郎

葛城艦長海軍中佐伊東吉五郎殿

海

軍

軍艦島城坐礁前後明細書

小官ハ明治三十三年十月七日正子ヨリ當直ニ當リ六日午後土時五十分頃船橋ニ至リ前直將校福島大尉ヨリ當直ノ引継ヲ受テ終ラ直ニ羅織ヲ換シ正當ノ針路南五十五度西(羅織路)ニ在ルヲ以テ具依船橋左舷ニ至リ陸岸ヲ探認スルニ努メタリ蓋シ前直將校ヨリノ申継ニ依レバ推測上本船ノ位置乳ヶ峯附近ニ在ル筈ナリシモ降雨ノ為ノ地物々体ヲ認視スルニ困難ナリシヲ以テナリ此時已ニ船長ノ航海長モ共ニ船橋ニ在リテ陸岸ノ発見中ナリシヲ見受テナリ斯クテ稍ヤ二三分ヲ經タル頃船首ノ方向ニ於テ濛朧トシテ黒雲變ルル如クモノヲ見陸岸ニテハ有ラザルカト怪ムト同時船長ニ而舵一杯ト令セラレ直ケニ後機停止ノ令ヲ發セラレタルヲ以テテレグラフヲ停止ノ位置ニ移シ次ニ後退全速トナレ接針手ニ命ジテ船ノ周圍ヲ探認セシム時ニ土時五十六分次ニ兩舷ハウニ於テ森林ノ見出

海軍

シ又中央一帯海水ニ洗ハレツアル岩礁ノ陸岸ナルヲ知ル此時ニ及
 ニテ前部甲板ヨリ頻リニ後退コト呼ブモノ有ルヲ聞ケリ後退約
 三四分七日止子ニ至テ船底残所ニ触レタルヲ以テ直ケニ停止右
 形錨ヲ用意シ防水扉ヲ閉シ防漏扉出シテ用意ヲ命ジ測鉛
 投セシメタルニ前部由尋後部五尋左舷カ門附近ニ於テニ尋ノ淺所
 アルヲ知レリ此頃ハ乗組員モ大概上甲板ニ出テ各應急ノ事業
 ニ從事シ得タレバ艦長ハ總員ヲ右舷側ニ就カシメ後退全速ヲ試ミ
 レタルモ其効ナキヲ以テ前ノ事業ニ復シ官モ艦長ハ令ニ依リ後
 部兵員ヲ指揮シテ「スパンカー」ヲ展シ暫時シテ之ヲ絞リ俟ラスト
 リーム「タンカー」運搬用意撤リシモ暗夜天候ノ凶悪ト艦体ノ激
 動ニ依リ事業甚ダ困難ニシテ急ニ遂行スルヲ得ズ此間數次後
 退全速ヲ試ミラレタルモ更ニ其効ナク艦体ハ漸次風波ノ為風下ニ
 廢沈サル、傾アリタレバ零時三十七分ニ至リ右舷錨ヲ投入シ防漏

蒭出シ方ヲ試ミタルモ艀底線ヲ通フシ能ハガリシヲ以テ之ヲ出ス
 能ハズ一時十三分ヨリトツアマストト卸ロシオニ掛リ停ラストリム
 アンカール運搬ノ望ナキヲ以テ右艀ノケツゲアーカーヲ扱下シ尚ホ友
 艀ノケツゲアーカーヲアープノ右艀側ニ運搬スルイトシケツゲ
 アーカー取入方ノ監督ヲ為シ居ル中横須賀ニ出張スルイト
 ナリ大臣皇用竟ヲ敷正へ本艀ヲ出テシハ午前一時頃ナリレタ
 時天候降雨アリ北東方風連吹レ具力ニ乃至三ニ至リ波浪ハ
 凡ニ對シ寧子口高カリシカ如シ坐礁后雨少シク稀濛朧丸月
 影ヲ見タルアリシモ大概暗澹タル光景ナリシ

明治三十三年十月十六日 海軍中尉 今泉哲太郎

葛城艀長海軍中佐伊東吉五郎殿

0753
0754

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同



坂常

第三部

総理局長



第二課長

第一課長



城

本部

第三部

第一課

大島

着入渠久「機園部外兵員ノ年
終ハ迄ハ大島ノ城セリ
拾五ノ港

第二課

雲龍譚

第一課

第一局



高

第一課

雲龍譚

高

高

高

高

供覽

横濱支隊

軍務局長

軍令部

次長

0755

第一課

筋

横濱支隊

十月廿二日進達

横濱支隊 横濱支隊 横濱支隊

参謀

鹿野

参謀

山縣

山縣

山縣

副

山縣

山縣

山縣

高城、現、揚方、二、付、報告

一、軍艦高城遭難状況、實視トシテ、昨十八日

現場に至リ、之、當日迄、現状ハ、遭難以來二

週間、此間海面静穏ナリ、トシテ、僅カニ半日ナリ

ヲ經過シ、南ニ四或ハ五ノ北風ヲ侵ケ、モ艦

体ハ、全クテ上甲板及舷側共、更ニ異状ヲ

呈セ、

一、昨十八日、三或ハ四ノ北風ニシテ、殊ニ満潮ナリ、モ

艦ノ動搖至テ、少ナカリシ、然レモ艦尾ヨリ中

央部迄、波浪ヲ被ル事屢々ナリ

一、艦内、全部ハ、水ニ入ル

第一層

第二層

海

軍

横濱分社印刷

一萬城乘負の浮揚事業結了迄今日ノ
 舟艦をこナラルコトヲ望ム其故ハ全島ヲ通
 シテ僅カニ男女百五十人許ノ人足ヲ得マキ
 モ彼等ハ重ニ勞働ヲ忌ミ且ツ一日一人ニ付
 金九拾錢内外ヲ給セザレバ使役ニ堪ヘ
 サレバナリ

一十月初旬ヨリ下旬至ル間ハ海上大ニ平穩
 ナルコトヲ聞及ビシヲ以テ此間ニ於テ排水後
 艦体ヲ少シク安全ノ位置ニ移シ本艦ノ機
 械ニ假修理ヲ加ヘ自走ヲ以テ房州館山
 航ノ見込ナルモ若シ同艦々尾ニ充分ナル錨地
 アラバ軍艦武藏ヲ以テ排水后曳航ニテ館
 山、面航ノ見込

一 排水後本艦ノ機械凡ノ三週間ヲ要スル
見込

一 今日ノ急務ハ第一大砲ヲ陸揚シ第二週難地
ニ唧筒貳基并ニ蒸気罐ヲ送り統テ完全
ナル繋留用具ヲ輸送シ諸材料整頓次第
艦底ノ損所ニ假修理ヲ加ヘ排水スルニ在リ
而シテ排水ニ要スル時間ハ凡ソ五時間乃至六
時間ノ見込ナリ

一 十月下旬ニ至ルモ不幸ニシテ機械ノ運轉見込
ナキトキハ来春ヲ待テ曳出スノ外手段ナ
シ

右及報告候也

明治三十三年十月十九日

信濃分社印刷

高城引揚委負長新井有首
 横須賀鎮守府司長官男寿井上良馨殿

